

強制収容所の少女

きょうせいしゅうようじょ

シズエ・タカシマ作
前川純子訳

富山房



強制収容所の少女

シズエ・タカシマ 作
前川純子 訳



富山房

目次

1	一九四二年三月、プリティッシュ・コロンビア州、バンクーバー 汽車の駅で……………	3
	一九四二年、夏……………	7
	博覧会場をたずねて……………	9
	一九四二年九月、バンクーバー……………	12
	ある夜の外出……………	13
	待つことの終わり……………	15
2	一九四二年九月、プリティッシュ・コロンビア州、ニュー・デンバー……………	18
	近くの村へはじめての散歩……………	20
	夜、家で……………	24
	ストライキの呼びかけ……………	27
	争い……………	29
3	一九四二年十月、学校……………	32
	学校の始まり……………	34
	初雪……………	37
4	一九四二年、冬……………	39
	赤十字の人たち……………	40
	一九四二年、最初のクリスマス……………	42
	わが家のクリスマス……………	45

5

一九四三年、はじめての春	47
父さんの野菜畑	49
とんでもない決心	57
日本から贈り物が来る!	61

6

一九四三年初夏、ついに水道がつく!	63
ヨコさんと毎朝のお祈り	66
六月、ぐんぐん育つ野菜畑	69
一九四三年夏、水泳	71
お祭りの日	73
共同浴場	75
夏の夜	77

7

一九四三年秋、ユキの高等学校	79
悲しい別れ	84
おそい秋	86
酒づくり	88

8

一九四三年、クリスマス	90
-------------	----

9

一九四四年、春	93
デイビッドからの贈り物	95
歌舞伎の上演	98
一つの出来事	103
一九四四年冬、火事	105

一九四五年三月、最後の年……………	109
五月、ドイツの降伏……………	110
六月……………	112
七月……………	113
メアリーとの散歩……………	115
一九四五年八月……………	117
戦争が終わる……………	118
一九四五年九月……………	120
おわりに……………	
一九六四年六月七日、オンタリオ州、トロント……………	122
あとがき……………	127
訳者あとがき……………	129

強制収容所の少女

一九四二年 三月

ブリティッシュ・コロンビア州 バンクーバー

日本は、アメリカ、イギリス、そのほかの連合国と戦争状態にあり、わたしの生まれた国カナダは、その連合国の一つでした。わたしの両親は日本人で、日本で生まれましたが、もう長くカナダ人として暮らしてきて、いまでは、歴史の浅いこの国をささえる、大事な力になっていました。けれども昨夜、カナダ国民としてのわたしたちの権利はとりあげられてしまいました。日本人全員に対する強制収容がはじまったのです！

「日本人みんながね、」両親はわたしを気づかって、こう説明してくれました。「東京で生まれようとバンクーバーで生まれようと、そんなことにはおかまいなく、遠いところへ送られることになったんだよ。このブリティッシュ・コロンビアの西海岸から、ずっとはなれたところにね、——つまり大事をとるっていうことなんだがねえ。」

わたしたちはみんな行かなければなりません。姉さんのユキ、兄さんのデイビッド、それに父さんと母さん、親せきの人たち、——みんなです。

まず、おとなの男の人たちが送られることになりました。政府は、父さんや父さんの仲間が、警察や政府の建物をしゅうげきするかもしれないとおそれているのです。考えてもごらんなさい。わたしには、とてもそんなばかばかしい話を、本気にすることができません。でも、目の前では父さんが、小さな旅行かばんに、わずかな着がえをせっせとつめこんでいるではありませんか。

ユキが言いました。「父^{とう}さんたちは、ロッキー山^{さんみやく}脈^{みやく}のふもとのテート・ジョーンへ行くのよ。だれもいないところなの。政府^{せいふ}も、山^{やま}になら父^{とう}さんが爆弾^{ばくだん}をしかけたりしないと思っているのね。」

おとなはひどくおびえていました。母^{かあ}さんはおろおろするばかりだし、母^{かあ}さんの友だちをみても、みんな同じようすです。まだ十一歳^{さい}にしかないわたしは、なんだか仲間^{なかま}はずれにされているようでした。

三月のある日、わたしたちは、汽車^{くるま}に乗^のる父^{とう}さんを見送^{みおく}りに、駅^{えき}へ行きまし
た。

汽車の駅で

空びんが一本、空中に投げ出されました。わたしは母さんの手をにぎりしめて、少しはなれたところに立っています。いかりの声や、暗い、のろいの言葉がとびかうなかに、金切り声があがり、汽車の窓がわれました。

男たちは、ほとんどが酒を飲んでいました。ひとりの、いかりくるった男が、大声をあげています。その人は、むりやり汽車のなかにひきずりこまれたのです。父さんが見えました。父さんも汽車に押しこまれています。父さんは、ス Tepp の上で、ふりかえりました。頭が、どなりあう人々の上に出ています。口をあけるのが見えました。父さんは友だちに大声で何か言い、固くにぎったげんこつをふってみせました。けれども、その言葉は、けたたましい騒音の中に消えました。母さんは、わたしの手をしっかりとにぎりしめました。

警官の笛が、するどく鳴りひびきました。わたしの全身の血が止まります。騎馬巡査隊の制服をきた警官が、ひとりの老人をひたててきて、汽車のなかにほうりこみました。のろいやおどしの言葉が、警官にむかつていつせいに上がります。古ぼけた汽車は、出発の音をとどろかせました。白い、地獄のようなけむりが、その頭のとっぺんからふき出します。機関車はうなり、それからまた、するどい音と湯気をふき出しました。ゆっくり、ゆっくりとエンジンは活気をおびてきました。

わたしは、自分が立っている場所からそのようすを見つめ、すっかりひきつけられてしまいました。大きな、黒い、まるい、みにくい車輪がゆっくりと動きはじめ、だんだんにその動きをはやめてゆきます。そして最後に、すすで黒びかりした機関車は、がくんとのめるようにして動きだしました。乗りおくれた男たちが、汽車のほうへかけより、動き出した機関車にすばやくよじのぼりました。

男たちは窓という窓に鈴なりになり、父さんはまだデツキに立っていました。父さんは、むらがる人々のなかを目でさがしているようにみえましたが、やっとわたしたちを見つけ、手をふりました。母さんは身動き一つしません。ユキとわたしは手をふりました。ほとんどの人がじっと立ったままでした。

男たちの日にやけた顔が小さくなりました。何人かの人、まだ大声でなっています。ユキが母さんのそばへ来ました。長細い、古ぼけた汽車は、線路をすすむにつれて、急速にスピードを増しました。そして、駅に残っているわたしたちみんなから遠ざかって行きました。

母さんはだまっています。わたしは母さんを見ました。涙がゆっくりと流れていました。涙はほほの上にとまります。わたしは顔をそむけ、まわりを見まわしました。どこでも、母親と子どもたちが、おたがいに顔を見あわせています。何人かの女の子が、そのとき大きな声で泣き出しました。腰の曲がった老婆が、こらえきれずに、お念仏をとえ、しわだらけの手でだいたい色のじゅうずをまさぐりながら、大声で、仏さまにお祈りをはじめました。母さんやほかの女の子たちも頭を下げました。が、もの言わぬ神さまは、どこかずっと遠いところのように思われました。

一九四二年 夏

一九四二年の三月から九月にかけて、母さんとユキとわたしだけがバンクバーに残されました。兄のデイビッドは、十八歳をこえているし、からだも健康ということで、どこかへつれて行かれました。わたしにはどうしてもよくわからないのですが、あんなにやさしいデイビッドが、自分の祖国の敵とみなされているのです。順番が来て、わたしたちを残して出かけるときに、デイビッドはいったい何を考えたでしょう。ほとんど何も言いませんでしたが、こう言っていたのだけはおぼえています。「とにかく、ここからはなれたほうがいいんだよ。仕事もくびになっちまったし、白人はぼくをじろじろ見るんだ。こんな調子じゃ、いまに飢え死してしまおうよ！」

いま、家のなかには空っぽです。売れるものはなにもかも、わずかばかりのお金にかえました。ラジオは警察が来て、持って行ってしまいました。いとこの家には、何エーカーものぶどう園があったのに、すっかりおいて来なければなりませんでした。トラック、トラクター、土地など、みんなとり上げられました。通知が来てからほんの数日のうちに、バンクバーに移されたのです。

へんなうわさがひろがっていました。わたしたちは、何一つ持つことをゆるされず、政府がわたしたちの家庭を力ずくで支配するということです。

父さんもないし、デイビッドもつれて行かれてしまつて、母さんはどうすればいいのかわかりません。あまり口に出しては言いませんが、男がみんななくなつたので、どうやって食べていけばいいのか、母さんはひどく心配していました。そこで、とうとう、ユキが働きにでかけました。ユキは十六歳でしたが、ある年をとった女の人のつきそいになったのです。週に一度、わたしたちのところへ帰って来ましたが、何だか、急におとなになったようでした。

わたしは母さんと身をよせあうようにして暮らしました。とにかく、わたしたちは二人きりでしたから、わたしはよく母さんにくっついて、いろんなところへ行きました。多くの日本人の家族が、いま、ブリティッシュ・コロンビア州の西海岸の、ポート・ハモンドやステイプストンのような田舎の町から移されて、バンクーバーの博覧会場に住んでいます。こうして、強制収容される日が来るのを待っているのです。

ひどく暑い夏の一日、母さんとわたしは、そこに移されて住んでいる、母さんの友だちをたずねました。

やけつくような七月の太陽に真上から照りつけられながら、母さんとわたしは、何度も来たことのある博覧会場に近づいていました。けれども、見たところ、このまえ来たときとはすっかりようすがちがっています。音楽もジェットコースターも、色とりどりの風船とあまいキャンデーをならべていた物売りの姿も、なにひとつそこには残っていません。そのかわりに、ぴんと張りつめた空気と、泣きさけぶ子どもたちが、会場に近づくわたしたちをむかえました。はいったとたんに、なにか強いにおいが鼻をつきます。まぎれもなく、牛小屋でかぐあいのいやなおい、牛糞と汗のまじりあったあのおいでした。牛や馬はどこかに移されたのですが、その悪臭だけは消えずに残っているのです。それが、暑さのせいで、いっそう強くおいしました。わたしは母さんを見ました。

「わたしたちは、牛や馬と同じにみられてるのよ！」と母さんは大きな声で言いました。「ねえ、みんなはこんなくさい中で、どうやって眠るのかしら？」とわたしはききました。母さんはわたしを見て、「神様に感謝しなくちゃね。わたしたちはこの人たちみたいな生活をしないですむんですもの。まったくひどいもんねえ。まえにはここで家畜を飼っていたのよ。ほんとうに、なんの因果でこんな目にあうんでしょうね。」

コンクリートの建物に近づくにつれ、その悪臭は、暑さと湿気がくわわったせいもあって、ますますげしくなりました。わたしはすぐにも逃げ出したい気持ちで母さんを見ました。が、母さんはいっそう足を早めただけでした。まるでわたしたちは、日曜学校の先生が、ひどく熱心に話してくれた、あの地獄の底にでもおりて行こうとしているようでした。

白い、すけたようなシャツが、むぞうさにひもにかけてあって、それで外か

らののぞき見をふせいでいます。鉄製の粗末なベッド、いくつかの金のいす、旅行かばん、箱、それに、このくさったような暑い空気でかわかそうと、あたり一面にほしてある衣類などが、まずわたしたちの目につきました。母さんはいすにすわって、友だちを見ます。アベ夫人はベッドに腰をかけ、赤ちゃんに乳をふくませています。その子は、うとうとしながらも、音をたてて母親のお乳を吸っていました。アベ夫人はそのようすを見てにつこり笑い、母さんに言いました。「食べるものはずいぶんよくなったわ。わたしたち、毎日のように文句を言ったし、一日じゅう食べないで抗議したこともあるのよ。いっさいの持ち物をとりあげたうえに、夫までつれていっておきながら、そのうえ豚小屋みたいな家で、豚のえさを食べさせようっていうんですからねえ！」

アベ夫人が母さんに不平不満を打ち明けます。わたしはあたりを見まわしました。子どもたちの声が、大きなコンクリートの建物のなかではねかえっています。何人かの子どもは、走りまわっています。セメントの床は、強い薬品のおいがありました。わたしが、そのよごれた灰色の床をじつと見ていると、アベ夫人がこれに気づいて言いました。「あいつたちは一週間に一度クリナーで床をあらうの。まるで私たちが生きているか死んだのか、それだけを気にしているみたいなのよ。」

だらんとたれたカーテンのかげから、だれかがものめずらしそうに顔をつき出して来ました。アベ夫人はこれを見ると、おこつて、「おせっかい女め！」と大きな声で言いました。黒い髪の毛のその顔は消えました。アベ夫人はわたしのほうをふりむいて、じつとわたしの目を見つめます。まるで、わたしがここに住んでいる人間ではないし、それにまだ子どもで、この不幸になんの責任もないのだということを、忘れたようなようすでした。わたしはなんだか居心地が悪くなりました。そっとひじで母さんをつきます。母さんは、わたしの合図の意味がわかると、立ち上がっておじぎをし、二言、三言はげますようなことを言いながら帰ろうとしました。アベ夫人もおじぎをし、母さんにお礼を言います。

「あなたは運がいいわ、ずっと自分の家に住めるんですもの。それに、お子さんたちも大きくて、頼りになるし……」その声がだんだんつぶやくような調子になり、だまったかと思うと、夫人はわっと泣きだしました。赤ん坊も目をさまし、おびえて泣きます。いくつかの顔がカーテンのうしろからあらわれ、好奇心にあふれた目がのぞきます。アベ夫人は赤ん坊をしつかりと抱きよせ、その小さな首のところに顔をつけて泣いています。わたしはそっとその部屋を出しました。

横目で見ると、汗にまみれた子どもたちが、みんなぼかんと口をあけてわたしを見ています。わたしがよそから来たことを知っているのです。わたしは見ないふりをして、足ばやに外へ出ました。そこで、あの動物のにおいがまたおそいかかって来ました。ふりかえると、母さんがあとからついて来ます。

「あんなふうにして帰るなんて、失礼ですよ。」と母さんがしかります。母さんの黒い目がわたしの目を見つめました。わたしは後悔してうつむきます。コンクリートの地面が、燃えるような暑さでとけそうでした。わたしは、夏の白くつのなかでつま先をちぢめました。白いくつは、歩いてきたので、ほこりまみれです。わたしは顔を上げました。「ごめんなさい。どうしようもなかったのよ。おぼさんの泣き声とあのにおいで……」

母さんはわたしの手を取り、二人は電車の停留所にむかって歩きはじめます。「いつか、あなたにもわかるわ。アベさんは母さんよりだいぶ若いし、この国に來たばかりで、日本にいる家族とも別れてさびしいのよ。御主人がたった一人の頼りだったのにねえ。」

大きな音をたてて走る電車に乗ってからは、母さんは、家へ帰るまでずっとだまっていました。わたしは、あのくさくてみじめなところから帰れるのがうれしくて、いろいろと空想にふけります。ユキが、いつかつれて行ってあげると約束してくれた、タイロン・パワーの映画のことを思いました。

一九四二年 九月
バンクーバー

夜の外出が禁止されました。日本人はみんな、午後十時までに家へ帰らなければなりません。日本との戦争は激しさをくわえ、町の人は憎しみの目でわたしたちを見ます。姉さんのユキは仕事をやめさせられましたが、あの老婦人はそれに対してなんの理由も言いません。わたしたち、母さんとユキとわたしは、収容所に行くようにという知らせを待っています。もう、たくさん家族が、収容所にむけて出発して行きました。